

「教会はいろんな人がいる」

マルコによる福音書 2 章 13～17 節

I 導入部

- みなさん、おはようございます。メッセージの前にお祈りをしたいと思います。

祈り

- 愛する天のお父様。あなたの尊い御名をあがめ、心より賛美いたします。
- 本日、このように、この場所で、ここにいらっしゃる、本当に尊い、あなたが愛しておられるお一人ひとりとともに、礼拝を捧げられていることを、心より感謝します。
- 私たちはあなたが必要です。あなたの助けなしでは、この世界にあって、希望を持つことはできません。だからこそ、このように、あなたに礼拝を捧げられることを、心より感謝致します。目には見えませんが、あなたがここにおられることを信じ、あなたに期待をします。
- ただいま、聖書が開かれました。あなたが、聖霊さまにあって、導いて、書かせてくださった、このいのちのことば、神のことば、あなたの思いを、私たちが本当に悟ることができますように。どうか、私たちの心を照らしてください。
- 罪深い者、弱き者が、取るに足らない者が、あなたと教会に立てられたゆえに語ります。準備の中であなたが助けてくださったことを信じます。どうか今も、助けてください。憐れんでください。あなたの心を、あなたが教会に語りたいことを、忠実に語るすることができますように。
- 今日江上先生は、浦和教会でご奉仕にあたっておられます。どうか、先生の上に、そして浦和教会の礼拝の上にあなたの助けがありますように。
- また、今日ここに来たくても、来ることができなかった兄弟姉妹もおられます。あなたがその場所にあつて、あなたとの深い交わりを与えてくださいますように。
- あなたに、ただあなたに期待し、また感謝をして、私たちの主イエス・キリストのお名前を通して、この祈りをお捧げいたします。アーメン。

説教題について

- 本日の説教のタイトルは「**教会はいろんな人がいる**」というものです。
- ある程度、教会に通うと分かることですが、教会には、いろんな人がいます。教会という場所には、ありとあらゆるタイプの人々がいます。
- 私は、平日は、KGK キリスト者学生会という超教派の大学生のクリスチャン団体に働いています。KGK で、よく学生たちに言うのは、KGK に来ると、同じクラスだったらおそらくしゃべらなかつただろうな… という人と出会うよね？そう言うと、みんな「うんうん」と頷きます。
- 教会もそうだと思います。おそらく教会に来なかつたら出会わなかつたであろうタイプの人と出会う。
- 私も、これまでいろんなタイプのクリスチャンの人々に出会ってきましたが、出会う度に、「クリスチャンとはこういうタイプの人だ！」という前提をことごとく覆される。「クリスチャンとはこうこうこういう感じだ」という前提が全然通用しない。考えうる限りいろんな人が教会にはいる。
- そこから分かるのは、誰もが、神さまにとって、尊い存在である。「こういうタイプじゃないとクリスチャンになれない」などということは全くない。
- だからこそ、教会にはいろんな人がいるわけですが、それは、イエスさまの周りにいた弟子たちもそうでした。全然違うバックグラウンドの人々の集まりでした。
- 今日は、その中でも、「え？この人も？」という、1 人の人をイエスさまが招かれたストーリーをご一緒に見ていき、イエスさまをご一緒に礼拝していきたいと思うのです。

II 本論部

一. 徴税人を招くイエス

- 本日の箇所は、衝撃的な出来事で幕を開けます。
- イエスさまがあるところを通りかかったとき、「**アルファイの子レビ**」という人物を弟子として招かれたのです。
- なんでそれが衝撃的やねん！と思われるかもしれませんが、それは、このレビという男が、「**収税所に座っていた**」と書かれているからです。

- 当時、聖書の舞台であるイスラエルという地域を支配していたのはローマ帝国という国でした。
- ローマ帝国は、イスラエルを、圧倒的な軍事力で、暴力で占領し、支配下に置いていた。そこにいたユダヤ人たちを二級市民、劣った人々として、下に見て、お金や農作物を搾り取っていたと言われます。
- イスラエルのなかでも、イエスさまが育ったガリラヤという地域はさらに特殊で、ローマ帝国の下に、ヘロデという王様もいて、この人にも税金を払う必要がありました。
- この人は残虐な王として知られており、ガリラヤの人々は、この人のことが大っ嫌いだっただ。でも、彼にも税金を払う必要もあった。
- さらに、三つ目ですが、イスラエルの人々には「神殿税」というものがありました。エルサレムにあった神殿に捧げる必要があった。
- 「神さまに捧げるんやからいいやないか」と思うかもしれませんが、当時の神殿は政治的な力もあって、神さまの名のもとに、人々からお金をふんだくって、礼拝は形だけになっていた。
- だからこそ、イエスさまは、やがてこの神殿に殴り込みに行くのですが、人々はそこにも税金を払う必要があった。
- さらに、当時のシステムとして、徴税人（取税人）は税金を取るときに、決められた分よりもたくさん取って、それを自分の懐に入れることもできたそうです。
- ローマ帝国、ヘロデ、神殿という巨大権力、パワーがバックにありますから、逆らう者を捕まえて、殺してしまうこともできたでしょう。
- ここに出てくるレビも、おそらくそのような強力な権力を利用して、利益をあげていたと思われる。
- こう考えると、こういう職業についていたレビを、イエスさまが招かれたということの意外さ、衝撃、奇妙さをお分りいただけるのではないかと思います。
- イエスさまは、貧しい人々、苦しむ人々の味方として知られていました。先週、西日本を中心に、大雨によりたくさんの人々が被害を受けました。このなかにもご家族やご友人が被害に遭われたという方がいらっしゃるかもしれません。
- この当時も、イスラエルでは、災害があり、戦争があり、人々は苦しんでました。イエスさまは、苦しんでいる人々の友となり、彼らを励まし、パンを分かち合い、祈られました。
- 金持ちや権力者を批判して、いじめられている者たちの側に立ち、彼らをこそ招かれた。
- イエスさまがそのような方であったということを考えると、レビはイエスさまの敵の側にいたと言っても良いでしょう。
- でも、イエスさまは、レビを招かれたのです。レビに言われたのです。「わたしに従いなさい」。
- それを見ていた人々はびっくり仰天したことでしょう。
- 「え？なんでこんなやつを招くんですか！？」
- しかも、その後、イエスさまは、レビの家で食卓に着かれたとあります。そこに取税人や罪人たちが大勢やってきて、イエスさまや弟子たちとともに食事をしたとあります。
- ここで言う「罪人たち」というはおそらく、売春婦たちを指しているのではないかとされます。貧しさや、また様々な傷ゆえに、わかりやすく性的な罪を犯していた人々のことを指していると思われる。
- イエスさまの弟子たちは、漁師とか、ほとんどはいわゆる当時の一般市民です。その意味で、彼らはレビのような取税人たちの被害を受けていた人々だった。彼らにとって、レビをはじめとする取税人は「敵」でした。売春婦たちは、支配者ローマの価値観に染まった汚れた人々だった。
- でも、ここで彼らはともに食事をしている。ここには奇跡的な、ありえない出来事が描かれている。敵同士であった者たちが、本来一緒にいるはずのない人々が、イエスさまのもとで、ひとつになって食事をしている。
- 普通にはありえない、奇跡のコミュニティが、イエスさまのもとで作られた。驚くべき出来事が、ここで起こっているのです。

二. 罪人たちの共同体

- 聖書は「希望」を語っています。
- イエスさまについていくときに、イエスさまに従っていくときに、かつて敵であった者同士が、本来一緒にいられないはずの人々が、ともに食事をするようになる。奇跡のコミュニティが作られていく。

- 先ほど触れたように、イエスさま従った人々は、実に多様でした。取税人だった人がいて、売春婦だった人もいて、漁師だった人がいれば、学者タイプの人もいた。
- 繰り返しますが、だからこそ、誰もが、神さまにとって、尊い存在であり、「こういうタイプじゃないとクリスチャンになれない」などということは全くない。
- イエスさまの弟子たちはいろんな人がいて、そして同じように教会にはいろんな人がいますが、実は、ひとつだけ共通点があります。イエスさまについて行った人々には、一つだけ共通点がありました。
- 17節をご覧ください。「**イエスはこれを聞いて言われた。『医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。』**」
- イエスさまについて行くための条件が一つだけある。それは、罪人であることでした。
- 罪人でないと、自分は正しい人ではなく罪人であるのだということがわからないと、イエスさまについていけないんです。いや、イエスさまについて行く必要性がわからない。
- イエスさまは、それを医者と患者の関係に例えて、説明されています。当然ですが、丈夫な人は、健康な人は、医者のもとに行きませんよね。
- 私は、基本的にはわりと丈夫ですが、昔からアトピー性皮膚炎があつて、よく皮膚科に行きます。あと、鼻炎もひどいときはひどくて、眠れないときもあつたりして、耳鼻科にもよく行きます。おかげで最近はいびるマシになりました。
- この中にもよく医者に行かれるという方もいらっしゃるでしょう。あるいは、今は体には何の問題もなく、健康で、病院にしばらく行っていないという方もいらっしゃると思います。
- たとえ、今は体が健康であったとしても、今はこの体については病院に行く必要がなくても、心が、魂が、完全に健康な人はいない、誰しものが弱さを持っている。罪という深刻な病にかかっているのだというのが聖書の主張であります。
- でも、やっかいなことがあるんです。それは、時に、私たちはこの病に気づかないほど、病んでしまうのです。
- 私自身もそうです。もちろん、私はクリスチャン歴なわりと長いので、自分に問題がある、罪があるということは、知識としては分かっています。でも、それを本当に理解できていないことが山のようにあります。
- これは私だけかもしれませんが、私には、こういう傾向があるのです。聖書を読まなくなると、自分ってわりと良い人やつなんじゃないかって思えてくるですね。
- 私は、クリスチャン家庭で育ったのですが、大学生になるまでは、自慢じゃないですが、ほとんど聖書を読みませんでした。
- みなさんは、「フーポンクリスチャン」という言葉をご存知ですか。一週間聖書を置きっぱなしだからホコリが積もっていく。だから、日曜日になったら、「フーポンポン」ってやるクリスチャンのことです。
- 特に私はその頃は毎週教会に行っていたわけでもなかったですし、教会に聖書を持っていかないことがカッコいいとなぜか思っていたので、さらにフーフーしなくちゃいけなかったのですが、その時代、もちろん私はクリスチャン家庭で育ち、神さまのこと、罪のこと、イエスさまの十字架と復活のことを教えてもらっていたので、知識としては、自分が罪人だと思っていました。でも、全然実感がなかった。
- しかし、大学生になって、本当にイエスさまに出会って、聖書を読み始めたんです。礼拝にも毎週出始めた。すると、面白いように、自分が罪人であるということがわかっていくのです。
- もちろん、その後も、時に、聖書を読まなくなるときはありました。そうすると、また「自分ってそんなに罪人じゃないかな」って思えてくる。
- もちろん、中途半端に聖書を読んで、けっこう賢くなった感じがして、「クリスチャンとしてのノルマを達成してるぜ」みたいになると、逆に「俺は偉い」みたいな感じで、本末転倒になっていくのですが、私たちが本当に聖書に本当に向き合うときに、自分には確かに問題がある、病があるということに気づくことができる。
- もしあなたが本当は病人であるなら、病気だということに気づくべきです。そして、医者のもとに行くべきです。
- もしあなたが本当に罪人であるなら、罪を知ることは「恵み」です。喜ばしいことです。なぜなら、その時に、あなたは医者なるイエス・キリストのもとに行ける、イエスさまを求めることができるからです。
- この世の中にいる医者には、治せない病もあります。

- でも、イエスさまは、私たちの心を、魂を癒し、永遠にいたるまで、たとえこの地上で死を経験するとしても、もっと豊かないのちを与え続けてくださる。
- あなたにどんな罪があろうとも、どんな過去があろうとも、罪を知り、医者なるイエスのもとに行くなら、イエスさまと一緒に、永遠を歩んでいくことができるのです。

三. それでも招くイエス

- 最後に、この箇所に出てくるパリサイ派の律法学者たちに注目したいのですが、彼らは取税人、罪人たちと食事をするイエスさまについて、このように言います。
- 16節。「[どうして彼は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか](#)」。
- なんて、あんなやつらを構うんですか。なんて、あんな、金にがめついやつらを愛するんですか。私たちこそ愛され、大切にされるべきです。だって、私たちはあの徴税人たちの被害者ですよ。
- どうして、あんな罪深い女どもを、そのまま受け入れるんですか。あいつら全然反省していませんよ。あなたは甘すぎる。
- パリサイ派の律法学者たちは、取税人を、売春婦たちを裁きます。イエスさまはもう赦しているのに、赦せない。
- こういうことってありますよね。イエスさまは赦している。そして頭では分かっているのに、赦せない。私にも当然あります。
- そして彼らは、イエスさまをも裁く。彼らは、自分たちと、彼らが、やっていることの内容は違っても、全く同じどうしようもない罪人であることがわかっていません。
- 自分は正しいと思っている。自分は病気じゃないと思っている。だから、徴税人を、売春婦たちを裁いていたのであって、その意味では徴税人たち、売春婦たちよりも深刻である。
- イエスさまは徴税人、売春婦たちをも愛されました。しかし注目したいのは、なんと彼らを裁くパリサイ派の律法学者をも愛された。
- 17節をもう一度お読みします。「[イエスはこれを聞いて言われた。『医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。』](#)」
- これは、もちろん警告のことばでもありますが、同時に招きのことばでもあります。あなたも罪人だろう？あなたも病をもっているだろう？あなたをも、招くために、私は来たのだ。
- もちろん、この後彼らはこの招きを拒否し、イエスさまにさらなる怒りを抱き、イエスさまを十字架につける。でも、イエスさまが蘇られた後、使徒言行録を見ると、パリサイ人、律法学者のなかかも、やがてイエスさまを信じる人々が起こされていったということも分かるんですね。

III 結論部

- イエスさまは、今日あなたにも語られています。「[わたしに従いなさい](#)」。わたしと共に歩もう。わたしが、あなたの罪を完全に赦す。あなたを変える。
- イエスさまはありのままの、そのままのあなたを受け入れます。
- でも、イエスさまは、あなたをそのままにはしておかない。
- イエスさまはそのままのあなたを受け入れますが、あなたをそのままにはしておかない。復活の力が、聖霊の力が、あなたを変える。まことの医者であるイエスさまは、あなたを癒す。イエスさまの姿に、イエスさまのように、愛する者に変えられる。
- レビは、別名マタイです。徴税人であったレビは、変えられ、マタイの福音書を書く伝道者となっていきます。
- もちろん変えられるには、時間がかかることもあります。そのプロセスは、葛藤の連続でしょう。私も、弱さを覚えることばかりです。
- でも、イエスさまは、ご自身が始められた働きを途中で放棄するような方ではない。必ず完成させてくださる。人生を通して、あなたを最高傑作に仕上げてください。
- 自分の力では無理です。でも、主が成し遂げてくださる。だから、今のあなたでいい。とにかく、わたしについて来なさい。わたしに任せなさい。わたしがあなたを変えるから。そのようにイエスさまは今日あなたに語っておられる。

- すべてはこの一言から始まりました。「わたしに従いなさい」。その招きに応えた人々が今日ここにも大勢おられます。
- 教会にはいろんな人がいます。でも安心してください。みんなが罪人であり、そしてみんながイエスさまに愛され、イエスさまと共に歩んでいます。
- あなたも今日そのような生き方に招かれています。この招きに、あなたはどうかどう応えるでしょうか。